



## 年末年始のお知らせ

新型コロナウイルス感染症予防につとめておりますが、来年も元日祭を縮小しつとめますのでご了承ください。

十二月三十一日

十六時〜

夕づとめ 大晦日の祭文奏上  
その後、元日祭の献饌

一月一日

九時〜

元日祭（会長夫妻おつとめ衣着用）  
親神様・教祖・御霊様 礼拝  
祭主 元日祭詞 奏上  
座りづとめ



よろづよ八首

会長 新年の挨拶

親神様・教祖・御霊様 礼拝

※残念ながら今年もお雑煮をご用意できません。

※お心でさき・御神酒をいただいでください。

※時間差でお越しいただいても結構です。

一月二日

十一時〜

【会長】大教会「年頭会議」に出席予定

発行所

天理教祝梅分教会

千歳市祝梅 598

☎0123-29-2055

復刊第三十二号

## 十一月 月次祭 神殿講話

今月もおつとめ奉仕者の皆さん、参拝の皆さんと共に心揃えて勇んでつとめさせていただきました。ありがとうございます。

また、十月二十九日には「ようばく一斉活動日」が各地域で開催され、参加された方もいらっしゃるかと思えます。次回は、来年六月一日か二日になります。またご案内させていただきます。

さて、二代真柱様が、陽気ぐらしというのは、「陽気ぐらしの一つの縮図が教会。これが拡大されていくところに陽気ぐらしへの世の立て替えがおこなわれる。」とお話されたという事を聞きました。今日の皆さんと一緒に勇んでつとめたこのおつとめも陽気ぐらしへとひろがることを願うばかりです。また、徳を頂戴できるのは、ひのきしんの行いとたんのうの心遣いでだともお話くださったそうです。そう考えると日々は、心細いかもかもしれませんが、常にコツコツとつとめさせて頂ければと思いま

す。もちろん今は年祭活動の旬に出会っています。そのコツコツが一步上をいくコツコツでありたいものです。その日々の心づかいの中で我慢や辛抱が、「たんのう」の心に変われれば、徳を積むことになるのです。

そして、もう一つの行いで積む徳とは、「ひのきしん」です。「ひのきしん」は、親神様に対して日々、感謝の心を態度に表すというものです。また、私の信仰している神様は素晴らしい、救けていただいているんだと思ったことを誰かに伝えれば因縁納消にもつながらるのです。日々、晴天の心で過ごすことはできません。心を曇らすことも多いと思えます。なぜ？と思うこともあるかと思えます。どうしても心が収まらないこともあるでしょう。でも私たちは親神様が結構にお与えくださっていることを知っており、かしのもの・かりものを教えられた我々です。必ずなるほどと思える時がきます。

教祖の逸話篇に

明治十八、九年頃のこと。お道がドンドン弘まり始めると共

に、僧侶、神職その他、世間の反対攻撃もまた次第に猛烈になって来た。信心している人々の中にも、それ等の反対に辛抱し切れなくなつて、こちらからも積極的に抗争しては、と言う者も出て来た。というお話があります。教祖は「さあ／＼悪風に警えて話しよう。悪風というもの、いつまでもいつまでも吹きやせんで。吹き荒れている時は、ジツとすくんでいて、止んでから行くがよい。悪風に向かうたら、つまづくやらこけるやら知れんから、ジツとしていよ。」とお諭し下された。とあります。

きつと当時の方々は、じつとしている時に神様を信じ切る事ができ、神に願うことをしたのではないかと思ひます。我々も同じです。そして、私たちの心遣いや行いが必ず陽気ぐらしへ向かつています。

来月は本年納めの月次祭になります。どうぞご参拝ください。

ありがとうございます。

## 百年祭へ飛躍の台

～親の声に添ってにをいがけ

おたすけを～

祝梅分教会 三代会長 高橋美津志

後編

十二月一日に葉書三枚だけを懐に入れ、無一文のまゝ東京を発つたのです。横浜あたりからは雨がシトシトと降り、冬の雨は肌をさすほど寒いものでした。二日も雨に打たれて歩いてみると手の感覚もなくなり、ようやく茅ヶ崎に着いた時に、寒さと空腹の為に駅のベンチに転げるように倒れて行ったのです。そうすると誰が知らせたのか警察官二人が来て、私を引きずるようにして交番に連れて行ったのです。ところが有難いことにそこにはストープは赤々と燃えており、しばらくする内に手の感覚も治りました。そうこうする内に警察官があれこれ尋ねてくるの

ですが信用してくれず、ハッピーのポケットに入っている手帳に書き込まれてたにをいがけの様子を見て得心してくれて、こんなことをしていたんでは野たれ死んでしまふから電車賃をやるから早く帰りなさいとやさしく言ってくれたのです。しかし、親の言葉に添って少しでも親の近くに行つて倒れるなら満足だと固く心に誓つておりますから、翌朝、その交番を出て只管に歩き歩いて、ようやくおぢばの神殿に辿り着き、あの砂場に額すいた時には有難く勿体なくて、嬉しくて涙がこぼれて止まりませんでした。丁度、母親が赤ちやんをお風呂に入れる時は、片時も赤ちやんから目を離さず湯船に入れるものです。しかし、子供も二才・三才になりますと洗い場で遊ばせておいて、自分はゆつくり肩まで湯につかるでしょう。何故なのかと申しますと、赤ん坊は自己心がなく、親に凭れ切っているから親は守るのです。子供が自分の好き勝手をするようになってきたならば、親の守りは少なくなつてくるのです。親神様に凭れ切

つて通つたところにおぢばまでお引き寄せ頂いたんだなあと、涙を流しながら私は嬉しかった。そうして板宿に向けて歩いたのです。神戸に着いた時には親指の爪ははがれて無くなつており、足を引きずるようにして板宿に着いた時には、神様は須磨に御鎮座され、大教会長様を始め役員先生方が板宿の最後の夜を過している所であつたのです。大教会長様にご挨拶させて頂くと、早速御飯にお湯を入れて、重湯にして食べさせてくれるのですが、御飯粒が喉にひつかかつて入らなく、汁しか入らないのです。すると「神様は須磨に移っているんで。こゝは大教会ではないんだから氣を確かにもつて須磨に帰ろ」と云われ、奥様に手を引かれ教会長様と共に引きずられるようにして須磨の大教会に帰らせて頂いたのです。着いてからは三日程足が立ちませんでした。十日程休んでおりましたら兵神の直轄教会の月次祭に行つて話をしてこいと言ふのです。素直に行かせて頂いた教会は道路に面した小さな教会

で、そこで神様のお話を説きながら、どんな病人でも天理教では救うかと話していたら、玄關から入ってきた人が「私は三木市の者ですが、親戚に寄つての帰り道、先生の話の聞くともなしに聞いたので、この先生に救って頂きたいと思つて挨拶にまいりました。」と言ふのです。翌日のその方の家に行かしてもらいましたが、この方は銀行の支店長で、その姉が十四年間精神分裂症で病院に隔離され、これまで医薬の限りを尽したけれども救からない。子供も三人いるので不憫で仕方ない。なんでも救うかると天理教なら救ってほしいと言ふのです。言われるまま加古川の精神病院に行きましたら個室に入つて猿のように鉄格子を動かしておりました。そこに座つておさづけをさせて頂いた所、十四年間どうしても救からなかった強暴性のある精神分裂症のこの方がおさづけを取り次ぎ終つたとたんに正気に復したんです。医学ではどうすることも出来ないと言われて十四年間金にあかして治療した病人

が、私のたった一回のおさづけで正気に復したのです。

考えてみますと、教祖のひなたは施し一条でお通りになつたのです。万人たすかるひながたなんです。どのような身上も、どのような事情も全てひながたの中にあつた鍵があるのです。その施し一条の道とは、ほどを越えることなんです。十の力があるものが五をつとめたならばほどこしではないんです。十の力のあるものが十を越えるつとめをしたならば、ほどこしとなつてどのような身上・事情の人もたすけて頂くことが出来るのです。

大教会長様の御心として、東京から十八日間歩き通したのです。その間、口に入れた食事はたったの四回で、あとは水だけなんです。睡眠も充分にとつておりません。

世間の常識・医学の常識から見たならば有り得ないことなんです。しかし、親の声に添うためにほどを越えて歩き続けたのです。

東京では一日に六十軒と心を定めて毎日毎日にをいがけに歩いて

おりました。それを毎月、毎年つとめていてなおにをいがけからなかつた私が、東京を遠く離れた兵庫県の三木市でにをいがけかかったのです。これが私の一番の信者であります。

親の声によつて始めて生かされてきたのです。如何に親というものは素晴らしいのか、私は秘々とその時に悟らしてもらつたのであり、皆さんには親の声に添つて行けば間違いはないということをし上げたいんです。

教祖百年祭の句というのは、にをいがけ・おたすけに明け暮れるんです。

教祖にある方が、「この世の中にあのいまましい恐ろしい赤鬼・青鬼というものがおりまじうか。おりましたならばどのような姿でございましたか？」とお聞きになつたことがあるのです。その時に教祖は言葉短く、「おにはいるで。おには恩荷や。」と恩を背負うている者がおにやでと言われたんです。

考えてみますと、世の中に沢山のおにがいるんです。豊一枚、ベ

ッド一つが己が住む世界となつて病んで苦しみ、青息吐息している人が青鬼で、思いがけない事情にぶつかつて腹を立てている人が赤鬼なんです。みんな恩荷を背負っているんです。この方々に私達はにをいがけをするんです。そのにをいがけをおをつけて、おにをいがけというんです。病んでいる人に尊いおさづけを取り次がせて頂き、事情で苦しんでいる人に神様のお話を取り次いで、事情のもつれをほぐしてあげるんです。これにをいがけなんです。

或る年の暮れに一人の信者がお屋敷に帰り、教祖にお目通りをして「神様のお陰で今年一年家内一同まめに過ごすことが出来ました。更にまた百姓の方も豊作で誠に有難うございました。」とお礼を申し上げたんです。すると教祖は、「礼を言う心、神は有難く受取るで。なれど人七人たすけなければ恩は返せんで。人だすけにつとめなされや。」とお諭しになつたのです。ですから私達の先人は、おたすけに行くことを御恩報じに行かせて頂きますと言ふんです。こ

れがにをいがけ・おたすけなんです。このにをいがけ・おたすけを私達は確りとさせて頂かなくてはならないのが教祖百年祭の旬であるのです。

来る昭和六十一年一月二十六日から二月十八日まで、ご本部に参拝することが百年祭だと思いがちですが、百年祭というのは病んでいる人、事情で苦しんでいる人におさづけを取り次ぎ、お話させて頂いてたすかった喜びを一月二十六日に親神様・教祖に御覧頂き、お喜び頂くのが百年祭なんです。

或る日、お屋敷に帰りました方が教祖にお目通りを致しました時に教祖が、「巽の方の土地が咲いている花を見てごらん」と言われ、何が咲いているんだろう。美しい花かそれとも珍しい花が咲いているんだろうかと思つて行きますと、そこにはカボチャの花が咲いていたんです。そこで教祖にカボチャの花が咲いていましたと申し上げると、「実の成る花は葉の下に咲いているんやで。実の成らない花は実につくところに咲いているんやで。徳というものはそれと同

じやで。人知れない陰で伏せ込んだものが徳となつてくるんやで。」とお仕込み下されたのです。

徳を積むということは何れほど大切なことであるかお分かり頂く筈であります。

教祖百年祭の今日の旬に遅れることなく、にをいがけ・おたすけに一生懸命におつとめ下さることをお願いする次第です。

女は台、教祖もこかん様も女性であられるんです。ですから女という字の横に台と書き並べると始めると同じようににをいがけ・おたすけの旋風を巻き起こすことを始める人は婦人会の皆様なんです。ですからここでのにをいがけ・おたすけの上におつとめ頂きますようにお願いを申し上げまして私の話を終わらせて頂きたいと存じます。どうもお付き合いを頂きまして有難うございました。



## 布教の家週報録

愛知寮 十月二十八日 高橋悟志

夏も終わり 暑い日々から肌寒  
い日々が変わってきました。僕は  
毎日 勇んで歩かせていただき  
ありがたい限りです。

この十月は二十六日の秋季大祭を目指して頑張ってきました。そして当日はマイクロバス一台とハイエース二台でたくさんの方々をおぢばへとお連れさせていただきました。たくさんの方々のご協力で事故なく勤めさせていただきました。ありがとうございました。

教区につながる信者さん方と通

い先の方々をお連れさせていただき、皆さんにもとても喜んでいただけました。

さらに勇んで毎日歩かせていただきます。



## 『教祖ご誕生祭、 第106回婦人会総会おぢば帰り』 ご案内

4月17日(水)  
～4月20日(土)

- \*飛行機の便など詳しくは未定です。  
費用は申し込みの時期で変わります。
- \*一月十日までに申し込まれると、安い航空券が予約出来ます。(宿泊込みで35,000円程度、キャンセル料は高くなりますのでご注意ください)
- \*その後は少しずつ費用が高くなっていきますが、空席がある間は追加させていただきます。
- \*それぞれでおぢばにお帰りいただけるの参加も大歓迎ですので、どうぞご検討ください。

